

「令和7年度 全歴研第66回研究大会（高知大会）参加報告」

第2分科会報告 愛川高校 松澤 友秋
第3分科会報告 藤沢清流高校 生田 幸士
第1分科会報告 鎌倉学園高校 神田 基成

はじめに

報告者たちは、令和7年7月30日から8月1日にかけて行われた第66回全国歴史教育研究協議会研究大会（高知大会）に参加した。大会は以下の3日間の日程で構成されていた。

- ・1日目：各分科会（第2～第5）に分かれての研究発表
- ・2日目：第1分科会（午前中、1日目の分科会を統合）、記念講演（午後）
- ・3日目：史跡巡検

以下に、報告者が参加した分科会の内容を記録しておく。

1 第2分科会（歴史総合）の発表内容

第1報告では、香川県立高松高等学校の櫻又英尊教諭より「日本史教員が行う歴史総合『その時 世界は』」と題した報告が行われた。日本史教員による「歴史総合」の実践として、共通テスト試行問題や入試問題を意識した実践報告であった。問題意識として、「世界史探究」の選択者がその知識だけで歴史総合の問題を解けてしまう現状に対し、日本史教員として「日本史の背景にある世界の歴史」を補う必要性を提起した。実践内容は、日本史探究で扱う部分を省略しつつ、日本史をより広い視野（世界史的背景）から捉え直すことで、科目本来の目的である「日本史と世界史の融合」を目指した内容であった。

第2報告では、愛媛県立八幡浜工業高等学校の竹井賢二教諭により、「行間」を教える授業実践が報告され、実業学校（工業科目が中心）における歴史の背景や流れを理解させるための実践が報告された。実践内容として、ドイツ統一（ビスマルク）を事例に、地図や年表、演説資料を活用して「なぜプロイセン主導で統一されたのか」を考察させ、教科書の記述の「行間」を埋める報告が展開された。

第3報告では、高知県立高知追手前高等学校の合田翔馬教諭と藤田樹希教諭が、自立した学びに向けた取り組みとして、日本史・世界史それぞれの専門の立場から、「自ら問いを立てる」ことを重視した実践報告があった。目的としては、現代社会の変化に対応するため、知識の暗記にとどまらず、論理的思考力や判断力を育成することがあり、手法として、基礎知識の習得から始まり、最終的に「自ら問いを表現して考察する」段階を目指すアプローチが採用され、単元のまとめワーク等を通じて、生徒が自ら問題意識を持ち、根拠に基づいて考える姿勢の変化が見られたことが報告された。

2 第3分科会（歴史総合）の発表内容

第3分科会では、四国全域から日本史探究の3つの教材化・授業実践が報告された。香

川県立観音寺第一高等学校（定時制）の細川健一教諭は、15 年戦争を生徒にとって「自分ごと」として捉えさせるため勤務校付近の戦跡を教材化した取組みを報告した。実践としては、観音寺海軍航空隊関連の戦争遺跡、満洲移民に関連する琴平町の戦争遺跡のフィールドワークを基軸に事前・事後学習を通して生徒に 15 年戦争を追体験させる内容であった。また、愛媛県立大洲高等学校の飛田亜希教諭は、現行学習指導要領が重視する探究のサイクルに着目し、その中でも生徒が「問い」を表現する過程を焦点化した実践を報告した。ダン・ロスステイン『たった一つを変えるだけ』をもとに複数の史・資料から生徒に問いを表現させ、その生徒の問いを基軸に展開する単元学習を報告した。また、高知県立高知追手前高等学校の堂元禄之教諭、同県立中村高等学校の松本創志教諭は、現行指導要領が目指す生徒主体の能動的な学習を、従来展開してきた講義型の学習のなかに組込むことで、個人の学習を深化させる個別最適な学習を試行する実践が報告された。

3 第 1 分科会・記念講演

第 1 分科会では、第 1 日目の各分科会の成果を持ち寄っての討論となった。大会を締めくくるとシンポジウムということで、高知県立高知追手前高等学校の合田教諭、堂元教諭、および第 4・第 5 分科会で報告された高知国際高校の宮川教諭、水津教諭らがパネリストとして登壇した。ここでは、多様な歴史教育の場面の中で、いかにして生徒の資質・能力を育成するかが議論された。特に、宮川教諭が第 4 分科会で提起した ICT を活用した「自走する学習者」の育成や、水津教諭の概念型学習など、先進的な取り組みの意義が再確認されたが、今後、地域全体で推進していかれることを期待したい。現場レベルでの試行錯誤と、それを支える理論的枠組みの融合は、学校を越えた連携の萌芽とも受け取れるもので、今後の歴史教育の指針となるものであった。

午後からは記念講演として、岡山大学文学部の清家章教授が『卑弥呼出現の背景』と題して講演を行なった。本講演で、卑弥呼の出現を個人の特異性ではなく、弥生後期の社会構造の変化の中で捉える視点を提示された。近年の考古学的成果を参照すると、女性は弥生中期から首長権に参画していたが、弥生後期には女性首長が一般化していたとする説を紹介した。軍事的緊張の低下や神仙思想の流行が女王擁立を可能にしたとも推察される。また未婚であることが政治的中立性を担保する条件となった点も重要であるとの指摘は、日本古代史における新たなジェンダー視点とも言うべき捉え方を提示していると感じた。

おわりに

3 年後に開催予定の神奈川大会に向け、以下の点が検討課題として挙げられるのではと考える。初めに、今回の発表者が日本史専門、世界史専門、またはその合同であったことから、歴史総合の分科会を設置する際は、両専門分野からの発表者を配置する必要性が考えられる。最後に、現状では各校の実践に統一性が見られないが、実践報告のトレンドとして、3 年後にはどのようなフェーズの実践報告が求められるかを見極める必要がある。この点は、次期学習指導要領の改訂の動きも注視しながら、分科会全体で議論していく必要があるだろう。